

受験 番号		氏名	
----------	--	----	--

〔一〕 次の文章は、大正生まれの言語学者外山滋比古が晩年に書いた文章である。「これを読んで、後の問に答えなさい。」

もうそろそろ半世紀前のことになる。

アメリカの有力週刊誌「タイム」が日本文化大特集をした。当然、日本語を扱ったセクションもあった。それはいいが、そのタイトルがなんと「悪魔の言語 (Devil's Language) であつた。アメリカ人読者向けにつけた表題だろうが、日本人からすれば許しがたい暴言であつた。

もちろん、「タイム」は、そのわけをのべている。いくつもある中、もっとも強調されたのは主語の問題である。

ヨーロッパ語はすべて、第一人称、第二人称はひとつである。英語なら I (アイ)、You (ユー) にきまつている。

ところが日本語には第一人称がいくつもある。わたくし、わたし、わし、ぼく、おれ、わがはい、せつしや、などなど。第二人称もフラフラしていくつもある。きみ、あなた、お前、きさま、おぬし、など。

こんなことばはほかにない。つまり、人間のことばではない、のだと言つのである。

まるで日本語のことを知らない人間の書いた記事らしく、欧米語と違つのはすべていけないという論法である。

この記者は、ことばにスタイルというものがあることは知つていても、それが人称にも及ぶ言語があることを知らない。スタイルは姿のことである。いくつも違つたスタイルのあるのが自然で、ひとつしかない、のはよほど「マズしいからである。

寝間着の人も、来客に対しては、着換える。外出するときも服装を改めるのが普通。よそ行きの衣服がないのは恥ずかしい。

英語は単純なことばらしく、寝間着もふだん着も、よそ行きもなく、着たきりスズメのように同じスタイルで通す。

それは自由だとしても、着換えをするのを悪魔呼ばわりするのははなはだ乱暴で、<sup>①</sup>それこそ、悪魔的である。そういう、<sup>②</sup>ハンセイをする力は、もちろん「タイム」記者にはなかつた。いい気になつて、それを言いふらしたのはけしからん。

「悪魔の言語」ということばを發明？する。サイカクもないから、<sup>③</sup>四百年も前のことを借用したのである。

その昔、九州へカトリックの宣教師がやつてきたが、日本語の勉強などしていなかつただろうから、日本人の話すことばがわからず苦労したらしい。カンシャクをおこした神父であろう、「日本のことばは悪魔のことばなり」とローマへ報告したのがある。つまり、神のことばではない、というのだが、わからないのは自分のせいであるとは考えず、ことばがいけないのだ、とするような、<sup>④</sup>ソザツな思考こそ、神の意から外れるものである。その尻馬に乗つていい気になつている二十世紀のジャーナリストも、似たようなものである。

「タイム」は、さらに、日本語には、第一人称、第二人称が、そんなにたくさんあるのに、使わないで、話したり、書いたり、できるのだ。あきれたものだという調子で日本語をけなしている。

ワレとナンジの関係、対立を基本にしているヨーロッパ語では、第一人称、第二人称は不可欠である。それでも、命令などでは、第一人称、第二人称は使わない。わかりきつているのに、ワレとかナンジをふりまわすことはない。日記の中にも、私とかぼくといったことばは不要で、これは英語でも行われている。

日本語はデリケートで、神経がごまかい。わかりきつたことを口にしたり書いたりするのは相手に対して失礼になる。必要もないのに、<sup>⑤</sup>「私」を出したりしてはおかしい。「私」は、<sup>⑥</sup>ヒカエメに姿を見せないのが日本語の、<sup>⑦</sup>床しぎ。

「わたくしが行きます」

というのは出しやばりである。ただ

「まじります」

でいい。だまつて、行つても、悪くない。

④ 日本語は親和的である。私というより、私たち、お互い、という言い方が好まれる。相手を立てるのが床しいと感じることばでは、なほだ平和的である。ヨーロッパ語は、攻撃的ナシヨナリズムをはらんでいるらしく思われる。

注1 タイム・アメリカ合衆国のニュース雑誌。1923年にニューヨークで創刊され、政治、経済、科学など幅広い情報を網羅している。現在でも、印刷版の読者数は、一六〇万人とも言われている。

問一 傍線部a s eのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線部①の「それこそ、悪魔的である」の「それ」の指示内容を補って傍線部をわかりやすく述べなさい。

問三 傍線部②でいう「借用した」のは誰が誰のことを借用したのか、四百年も前に使われた時の意味合いと、違いが有るとすればどう違うかわかりやすく答えなさい。

問四 傍線部③の「床しさ」のこの文脈での意味を次のア～エの中から選んで記号で答えなさい。

- ア 好奇心がそそられる様子    イ あいまいにぼかしている様子  
ウ 気品があり、どこどなく心がひかれる様子    エ なつかしく感じられる様子

問五 傍線部④の「親和的」と類義的に使われていることばと、対義的に使われていることばを本文中からそれぞれ一つ抜き出しなさい。

問六 問題文に取り上げた文章に続いて、「私は、ナシヨナリストになったような気がする。はっきり日本語を愛する心をいだくようになったのである。ことばはナシヨナリズムの根幹であるという考え方をもつようになったきつかけである。」という表現がある。これを踏まえて問題文に対する次の批評文の空欄A B Cにそれぞれ当てはまることばを抜き出して完成させなさい。

筆者の外山滋比古は、大正生まれの英文学者で、日本語を含む言語学、教育学への業績も多い。冒頭のタイム誌の日本文化大特集の話は、タイム誌の記者が日本語母語話者に喧嘩けんかを売っているとするれば、外山滋比古は売られた喧嘩を買った形になっている。外山が言うところの「A」が情緒的にも顔を出している。そんな中でも、言語学者としての知見は押さえて書かれている。端的には、ことばにはいくつも違ったBのあるのが自然だということ論じている部分である。日本語愛に溢あふれた著作である。

## 二 次の詩を読んで、後の問に答えなさい。

素直な疑問符

吉野弘

小鳥に声をかけてみた  
小鳥は不思議そうに首をかしげた。

わからないから  
わからないと

素直にかしげた

あれは

自然な、首のひねり

てらわれない美しい疑問符のかたち。

時に

風の如く

耳もとで鳴る

意味不明な訪れに

私もまた

素直にかしぐ、小鳥の首でありたい。

問一 作者が「ありたい」と願っているのは、どのような「私」か、比喻や象徴でなく、わかりやすく書きなさい。

問二 「ありたい」と願うということは、そうではない自分を意識していることになるが、それを詩に表すことで読者に同じような気づきをもたらす。それを正面から書いたのは、説教臭くなり、詩にはならない。この作品が、詩になるための発見を表している一行を抜き出し、その一行の解釈をわかりやすく書きなさい。